

求められる多機能化



「街の多機能化が求められている」と指摘する八戸学院大地域経営学部の田中哲教授＝5日、八戸市

八学大・田中教授

にぎわいの核となつてきた商店街が衰退し、空洞化が進む八戸市中心街。本紙アンケートを分析した八戸学院大地域経営学部の田中哲教授(66)は「買い物や飲食だけでなく、遊んだり、学んだりできる、街そのものの多機能化が求められている」と指摘する。商業機能の充実を求める声が多いことを踏まえ、「市民のニーズに応える店づくりや業態の開発に努めるべきだ」と訴える。

中心街の魅力については、6割弱が「あまり感じない」「感じない」と回答。一方で、「はっち」やマチニワなど人が集まること

ニーズに応える店づくりも

できる公共施設が整備された点を挙げ、「人が集まればいろいろな出来事が起こる可能性が生まれ、街の魅力につながってくる」との見方を示した。

あるべき姿では、8割強が「商店街の活性化」を求めたが、実際に中心街を訪れている頻度は「週3回以上」「週1、2回」が3割弱にとどまった。

「利用頻度は低いと言わざるを得ない」としながらも、「商店街の活性化を求める声からは、関心の高さがうかがえる。再生に向けた希望だと思う」と前向きに捉えた。

中心街で進むマンション整備計画により、街なかの居住人口が今後増加する可能性もある。

4月に閉店した老舗百貨店・三春屋に関しては、「建物そのまま10年も20年も放置するべきではない。建て替えかリノベーション（改装）か、どうなるか分からないが、跡地活用が中心街の再生の鍵を握る」と強調した。（工藤洋平）